

俳風

柳多留二十三編

29
1147
23



門へ9
1147
卷 23

吉例角力會
并二
奉納
白合
加入



は
後
ニ
イ
ダ
ス

誹風柳多留 廿三篇

流系新堀端川柳更年
 万句合の泉なる級利分上戸も
 下戸も情に感其く中も
 乞徒て如例柳多る亦三篇
 及虫林星運堂の送り
 各名相皆被下てせ
 如程



かゝるたる川を流るる女もすあとも目もあがり
まゝんむやう娘暑く時分におおもみあま
流るるうせ天女偽りそきりの浅
たかりでいりやあまと橋連があ
たをやうあ考と相流るの方をす
かんだんの礼法をいぢふ遊けりあ
海ら流るる命と新でぬるま
よふとく花を盗るもあぶなみの
ちくちくふ門とあくく十一日

あせどもとる居の外におあんな侍
あつたお娘とるもあくくあま
かんどいがるので登れあまこあ
しるあらの流るるあま蓮が咲
お花えのあまあまのあま
とく玉であげあまあまのあま
こ娘のあ抱あまあまあま
あまあまあまあまあまあま
たすのあ横あまあまあまあま

いそがしき十七歳と正 月
生々あざく小判と入るめうらさ
の候くお入りのあは後の月
田舎加ふるま形がうおかんと整へ
いそぢあざ二人うてめーやかめを焚き
色子のけもあゆまゆり念付ケ
ろく七人よのをまされて嫁いどめ
おあまごころな 白るハ鬼たご阿
六月上旬にて河を登んハ旅とする
おあハ舟うり 駕がおもい候し
はやる下女又飛入が二三人
孕にうハ世ふハ志まて小町をし
八朔に涼しいとつあ 仕合さ
鼻袖だらうキリが折る娘をえり
初舞 養あとも新大座をのらめ
初年を男走平 世信がやけ
八十年にふッ 平家ハ運が流さ
はぎやうさ 倍油の下で舟うふ孫

仁ころぬふら〜と来りや河さ
 撫つる多いぢやうとむつ故〜と
 佛繪と黒繪と行者もつて居ル
 女房の後う門に洗める婦んの半
 女房〜せの目ぞ居ル大向を〜
 けうせうと色こか母さ〜もかぬぢり
 法尊のぢひの生んとく〜あ
 法伴武志も夜ぼさき〜やと寝る
 へんと〜と途々たす 醫者ハゆきて
 別當が〜これ神にまゝと途々
 といの介カハ何にもないまゝに
 辰様ハぬゑう〜己後の清朝 麻
 たう赤〜のハ川に〜入り川ささ
 ぬす跡をぬ〜ぬお〜 禿 居ル
 乃明寺 欲とえあれ〜つめるあり
 多義の本お形つて居る紐や〜さ
 ち〜三のあがつと治〜入り女席
 ち〜と〜と途々てかぢやの火はあり

ちろとあるまでも密の巻をなつとが先
りちくたたとえくそ石むとよんぞ飛ル
あ腕のやみ子あもほと おもあり
隣家あまね斗りぬ 泣くそえト
ぬす人あ飛入りの有市二日
ぬすこ後握ってちやあくくーかな
ぬりまんぼくとねき控て下女も春
とあぶたのそくはく月がら
ゆれいゑりあむすぢあぬってか
奥あちろちろる口二十けん
あすちろちろりくとあむるあり
おーからの男ますりきりああや
おー愛り乃藝子あむらぎ女あきれ
奥の飛 おおやハる我の縁どり年
あト、ハ、見、のむ知、まぢとかさ
わさひあすあがらる屏をとらるくぬり
かげ清又三ツ多イがああ、の、名
待供養をんるそせがま人りあ

かどろく 城ほりやにみすつりしぬぞ
かどろく やの内庭むのらくら じん
かまらくの窓ハ 抱いてハをひくま
かゝの床不居ル ぬきかけのみあつ子
かゝるお口ハ 小林ハ 飛士のぶやま
かまらく 不居ル 内ハ おのちもすま
かゝのきふハ じんお口あくちり せき
かゝるお口ハ や強あつらんぞり
かゝどろく 冬ハ たらべり人ぞり
かぶきのあんなんちくまや けり けり
かゝるんの時ハ 小あき こととをん
かゝるく ことをしん 隣ハ おとつきの
かゝるん さいそ 自由なほりしめ
川 立ハ 川 水 毒ハ せんぞ 死に
よせ せん 城 三ツの 糸あそとらる 乙
夜ル 足 巻ハ 目 斗リ 何らく かゝる 猫
よ 火をすく やれと おん 登い 母 かりさ
ゆー 廣ハ 冬ハ 小あき あり 刀ナ かり

夜とぞとハ縁のころと志しうそをつき
たそと持チゆるさ親き縁おがも
ますつをせぬと一着ハすらすとま
たびがけよしてハ折リめまぎ一ハ寄
結らんるか一引いそくさむいそ
ますともちり人縁結めくもちをこき
すバ切りハ媛一もんどんハみッちッ
深物や竹一ふハ江戸ハやれ
袖取中葉石もつとを他々せ

つき花もその肉も有ル一トかき入
月ホクそくそきてかあちのそこと
ねときくこくはつてまゆまを二人リ連
ひく茶喰く品川とむけりこきま
あまの麻産あへまぬらゆりまの
あひ縄らぐくの声と持ッてリキ
らしかむらくる男が二三人人
む糸糸ハ損がほつてまられる
袖もるでまるとゆるさぬわがの糸

おや 妻がうおととらやいのち候一
むづいするかちちくぬとん可也一
馬うう ころをに居ちよかひ平一
る城あううとてハまごも一人ま
うせいのハお厚陽かむすめ 途チ
うううも 晒あこけあく 取
うまをううと居あとんて居ルぬやどり
わんそやううとぬり 孫くとあまごけ
家毎トよとれも一人うハあくままる
亀走一 ちよ候ッて来ルおしーろさ
のがけ及チ 折りあー連レをあくすたり
おのひお一 してハレテワキのきーて口
くいつこのぬいとお及ぶよめのせい
喰よものでなるのハ花とやう ぎしを
配り ぬちかか人 ぬちぬちて居し
弟おかりよりハせんくがぬうさ一
やまごくと娘とさまやるやう一 尼を
止まらう 居ざりとむらこにどど物

まどがおりかひを姑女をたづし
枕かや二もり三針うをちぢめ
けのやのめいんぎんかのもげどこのの
えい倍とすらあひをとけつ松ヶ罌
化粧女回ふドおめとめいんぎん何
ふの切しこ傘やめとかくくこれ
筆とあうまふけー炭で一ツ付ヶ
ぬさやうど横ふうごんたのうーさ
こまののや内い実室が金めりけ

玉府よりもさきりのつ三舎目
こら甘子のさむらいの物る松の内
呉娘屋の晝改家又杖とつさ
小姑トハ夫夫を男うと二人「まを
声あくらか子系内ととめあふ
小舟ヶふハ娘屋を控持ちあつこのう
思ひがわと舟ヶのちこし内我どし
ごこのすゝもくととぎけるんがうき
後家の髪は世でもふあぢい「あま

此きやうしんそで六尺のかくやすあ
ゆきしおのきんおき傘みふふ
ゆきん山むかしく返るおふで
きうきんの西家ごとと張安とぞ
こんきん娘とさづかんとぞ
あんあやの宵に菓子盆さうの
けんかーけい病軍師あり
恋のぬきととせぬめ病い
ゆきん大きなゆきんが
江戸の富士より系宿へすべり
てをわすれ川中くおすゆきん
天と地のほくかいはぬ石二の山
あの密信をたすめとあ川
ゆきの車もつたかきゆきん
赤子のゆきとあやるとあゆき
ゆきん世帯茶袋とゆきん汁とゆき
秋の月もらゆきん一白でハ
あゆきゆきんがゆきんあゆきん

みどされるもせいのりも娘のまは
見せせんきでくまきせるハ届チ舞
足今宵一さかとももの下がとちらるい
箕の市 中りハ江戸と何てよせん
足くもあさ茶やの表子りかくかゞ
しうかのぬとーと唱ししうとさ
あんなぞうの夜夜かれあふ花が咲キ
七半しの捲ハのこくばあがく
車カしもあで切ごそとがううられ
猪さるゑもをうさるる下
尻りひらうげ立向ふ下母の海り
志中しんとニッし蓄麦のりぬる
十二羽羽子板ふのせ 志うもる
尻りの片うぬ年のやろく
十三ハすうりさうんこ流ぶあり
急ぎすわう十日さーとおりうさ
柄を出して並く湯飯ハめさす
ひざの猫ひびく後りそい後 じん

ひきぬがうゝ意味線とこぶす三日
屏風巻うゝ途たハ三百里
百里ふど有ルと日づけよハキの信
百ぬ、あゝぬリ息ハのこらてら
初めいゝ殊あつものこゝろのやゝ
五ルまゝハ老ハくゝあやゝまゝを
ものゝやうゝ一丁ハ連一ハぬリ
物語リ 在リ 本巻ハキ 九ノ
物早かゝゝ成ぬらゝをハけな
ものどらあまゝお生酔ハぬんぞ
せん既此 是 者トと 吹クハすま
後 靴乃 有ル ながらんの組かゝら
晴而とも 昼夜がん ちかちかぎ
すかゝきもぬも 立つてく 大一丸
あぐハ初ゝくで 約 養百 ぬや
葎笠一あゝかゝて 飛ハすゝら
角田川 ますハハぬふとニ三人
すゝあや 物リ ちもてんや ぬがぬ

せんちりののみがらむ今このらんま
 二夜目子ハ三年しりの女房
 すむーア口とせんとあき 田所
 仕合ハ車むづらハんかがり
 あり又おそきついで月見城むける
 同ウ日のらんハすらごと 近江
 ああこハあかうあやと娘をこち
 け仕息どらちありとあか
 昨日の名おきしむつあき
 けさきと 娘のんごがあらど
 床元のロテのこあやんあき
 赤川ぞログすぶるといさき
 かりうりて飛ハ初まのり
 けさきヶ園へもあき
 あきさん及本のあきんぐん
 きたきしやふあきとあき百
 娘ハあきららあきの袂切し
 けさきをえたるあきとあき

名 山の麓 ときをいんて
息 杖でめとめいんハあまれ
筆をのさだ 惜念ニとる
ふー系のもみぢら乃やうる一寺
筆もすがめそく 指しげひる
あどけぬ山 高人筆とあつ角ケ
夫婦あめや、小月代めまんでる
古を江の系まぶら、まかけく
あつ谷かふとと 禿 山つり
見えひらうからちめそあくらま
まま、ハ、昔どやう 岡ぞ 帆をえさる
てんがひや花小嵐と ともえ居る
もみぢのこ、小摺みまと トケてま
座のめか唇 吸フ 夜よ あつはる
ハカ、か、仲 人 や、あ、あ
十み 後試 十一あやー 衣モ 見らる
十武文が 敵とトアハ ちまはとま
西けハ 半あんようんで 吸つてまらる

したたけかたがら思ひの終りをかけ
 せんがしや男のからとみえはけ
 夕立舟こり三百里たてつぎけ
 より後があぶあふと治部をつけ
 車引とあしとまらふあしとつけ
 熱湯いふをとおしとりのあし
 二人いついといはのあしづか内
 エツまこむのこしところがあし
 小海いふさきとあしとあし
 やらといふとあしとあし仁王
 中絶とあしとあしとあしとあし
 あけあしのをあしとあしとあし
 免のどかあしとあしとあしとあし
 かきつとあしとあしとあしとあし
 甲しとあしとあしとあしとあし
 女房とあしとあしとあしとあし
 谷汲であしとあしとあしとあし
 あしとあしとあしとあしとあし

しるしをたがへてのちあつて
あつてしるしをたがへてのちあつて
二十にそつと一語とつてしるしを
しるしをたがへてのちあつて
十めは子言のちあつてしるしを
八羽よるしるしをたがへてのちあつて
ううのちあつてしるしをたがへて
合席風あつてしるしをたがへて
筆状さへあつてしるしをたがへて
大つた筆あつてしるしをたがへて
せんごんのニタをたがへてしるしを
親者ハ子よのちあつてしるしを
何とだちんをたがへてしるしを
おとつてしるしをたがへてしるしを
うでわいの地をたがへてしるしを
たつものちあつてしるしをたがへて
むうの全整あつてしるしをたがへて

こゝろをふるふるお交で仲人あー
かんちやのハシで乳のどくを彫り
かたりちのおりけぐるでさへんあー
かてこけ田舎の縄と竿をか
かへりへ様をくしておりけ
れ光へ出さのさかおとあそび
あふくとおのを伯父か母か
おふやんきりものすをまらると
道かさきて穴がまらるとみ百

摺子あとし桶えぬおりと空を流し
夏よぶふ小判ハ見ぬとあふあ
あぐりきやせんと秋あそびのふ
かけ声の合ふ小声ぐ何ニ
あつたニ交りけさあ妙房ぞと
旅の宿をさしひ一十日ちびと
あやどんちりごらんちと女房
指メ目身ツと京の仲人
さふがけてあちやの尻をぐざと

り西の跡で梅君とまじり母まくり
ちんの字もそいよー丁やぶーい
あゝ縄をがひきやうづが根津でかい
泣きめかけかへへへたかひるふあ
立ちまぐり居まぐりまてせげんかい
女房のいづ後 髪をそりあゝ
こす榜の脚云成りして一っく
まゝあれとわけくこの月魚の子まぐり
千レこいん後とが親らんあてく
あぢな高貴 茶漬のしを ちちらるん
太市んをを居ねとあらま守さるん
大一丸を毒 首と ひとみ あん
汎松くぢうまり太市ん いと海がじん
迷の子の心乃らごぢる あれ平ん
うんきりハ男のそばハ 年一あ
髪が絡まきく 余のあゝ又く
あめわけよ 出乃とまじり母君
丸安宰 珠粒を掃らてあまか

柳と娘あさませる 楊枝 足色
の喜ふこころ 娘おと引き 合色
此物公の下り下 訪を却して足色
おんおんよしののころ ぬと うぐせ
呉の玉の代。もの 高月の足色を 賣り
たかり 一も言 尾の袴を 売って 紫り
すのぶを けり 夫が 板ヶ 糸り
奥乃 去 ぬり 八の ちど 手 げ 上り
ぬ房子 びろを 鼻ッ あり 宿り

鳥成 出る そ 下で 一ッ ぶく 付 して 巻り
九つ の 障 紙 切 い づ 一 賣 色 珍り
丹の 夢 へ かく ち 形 なが 賣 色 珍り
せし 巻 へ かな こと や こと 乃 中 力 不 散り
心 志 ん ぶ の 見 る 細 足 色 珍り 有り
人 志 ぶ だ 生 群 社 取 目 が 居り
又 百 人 足 物 乃 ち 大 齒 り
お だ ぞ の ち だ が 見 入 ぬ ち と 下 戸 宿り
舞 お だ ぞ の ち だ が 見 入 ぬ ち と 下 戸 宿り

あれぬをチ 猪子とツツキ 樽子振リ
信濃あそく さぬさのゆくとよく 綴リ
何平しとあんなやうな始 取リ
廿又ユかぐと花袋がやま じカリ
あゝと喰ふとちねひ 式あんなリ
ゆつと糸あんなく 娘と 娘子をリ
無で足 体ノ 落まをすこ 送リ
漕り人で居風 呂桶をかり 子をリ
まらり 尻をきかしく 居リ

去リ杖と有髪 のゆまは 娘と 三矢い
かこくしとあんなやうな焼 じがり
ゆつとみく せぬぬののこ 子びまがり
下女 簀の ものあそ 娘と かきやるがり
し 酔ひ 絳ゆと 娘と おうし けり
かきほをこがふと ちひの 卵と ちやう
芋が子ハやとん かむろよ ちびおらり
こまやくと ちやうと ちやうと 母車と けり
川端の おどろ ちやうと ちやうと ちやうと

見せよのよき白髪を待りつくり
人別れめどしるるぬきり
あしうきうき早板とおもひ
まてどおぢかぢやのてしきぬ
かきつけや一^ち日あぬれもす
いせーまで登るかかすむすこ
そ後でんでもくを娘もげびる
きりぐの口と去子とがハ下
もせ賣りとせぬけいさいの
花咲くぬといの遊いどき
きよとん越向の女良のや
中の子の愛をかりても
三^三長切で下切のキ
一^一やきとまどあち
あもよもあひとん
すらんお二階一
儀車一若流が一人
おしあありさちすこ

取んてらもあぐぢふねとあぐら形
梅柳山六ざらとくしと後る形
ちんりも物まをげきの花あり形
こがさうて寝がたいてい志がり形
めんおこが三十日でまきゆる形
猫の意がこまる時がこりれ形
後毒がすまもち死ス身言尾形
まがとく人まぐ雷の見奔形
首に打ち落し灰吹のそりぢ形

唐人と布袋さまが合せて
持ぶのとむすこ仲馬様もつさまる
そ人の容かきまひせいこぶ急ある
ほ登るもりんざんやでもぎのとする
はくゆんじのまんのまじり
がくしと日本のおも二人出る
サ房様うかぶ川へ形へまかき
舟がはるくそろうとぶら持ってある
去夜待ま一子もんど小かすさせる

こゝろやげむぢ 目やおぼろけの世である
一ッ生うお下交一家が教んちのける
そを賣リハ門ン成るんを 足るおけの
まゝるんが有と母おやあすゝまゝる
あか方の本戸のめとをむぢの 出の
らびすゝま一ッつらと持チまゝてゝら
口チをすゝしゝらうがふゝゝゝゝゝゝ
おつゝ風をくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぢゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
だまされるゝゝび平一母 おやちゝが出る
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あちぢんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大丸のけりお大キお 国々ゝゝゝゝ
寺おのちまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
約ハあゝゝゝが猪牙毎ハゝゝゝゝゝゝ
日けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぢんぢんのぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

走人リのる并にあけん乃外成りキ
 地紙う中かきんがて風を引キ
 おりくが済と信り人速をけキ
 江戸見物を雀々一テ羽付キ
 けせぬゆめとしがおまキ
 江戸のらんは只た事一が好キ
 写人ハ皆がりくとぞんお付キ
 将自らがんも一人リ上で一番キ
 高年次のあるまる人シ成密キ
 富士の山三つの種つのまりキ
 を人リの死ヌとぬりをまさが一
 生碎もありの終トのみぎやあ一
 まを分ま素見シおがしゆんがゆ一
 おもろとトぎるもんであさい出一
 一系の内は海の並の人でお一
 ちかのた矢キ一大小初で出一
 一たがのからお十三三まい一せ一

西正月七音用キ
 吉例花角力會

善徳 星運堂
 知進 薩秀堂

〇上の取
 氏子のおハ夜に定ツまい家をとて 洗路
 子もももゆけく 葉がはえ子入り 川南
 やの子もも井戸のゆりもしみかど様 扇朝
 京とはエとく朝夕成そもく カツル
 伊本坊むのお丹共は移りく 家共
 河んとうのかこうはレ戸のに月物る 芥丈
 幾ッ子ぬッもとおいくくり 宿祢
 いけいへは又平ふあてをかりり 法に
 田をあよへ娘も三年身とまづめ 風吹
 花のをつと移ど馬人があり カタル
 河東ぶー内で六後生ねぐんく 櫻本
 ぶいうよるついをぬる 初さらう 里山
 何ももまとかま入られるあぐりやー 洗路
 志やのりけの伐粒日のとんはかん 雨夕
 本娘のういあいんありりり 雨譚
 とうのやかからハまをくきる 如雀
 白娘のの戸成月見るまあてあく 家梅
 けいせいといんはれくりけぬる 雨標

玄園をんつこくよさむるけらまうら 柳取

一ッはくのくさきとせいでさうあやう 窓梅

○中の部
おつろのぬを小仕上る産あろう 唐紅

色年ハ二日たごうふよけのぬり いろも

そつろのぬをさうあはらうらる 窓梅

不二のあたまさうし川をさうらうい 菱中

志よやくぬ若虎なぶあをうらてある 虫香

金づくごさるもあふ戸ああは見え 菱中

ぬき店とつごさるもあふ戸ああは見え 里山

や絲板とあやうくさくさくさくさくさく 丸魚

それちうをさうらうとさうをさうらうらる 々

三浦一登の有れ細い見え子人たうり 力夕に

ゆハ付ケうらをさうらもはらうらるキ 雨夕

女房ハ外のどく立テ非りさう包 丸魚

こめちうとていもが向ひてやうぬし 洗踏

さうんのひを打ッ経子むすこぬり 里山

はさうではれるものうと大らんを 狸声

大キおあう子引ッなる花のられ 山取

後三年こめぶらぬ子か〜格め
山雨
左備

○前之部
ゆの日のすらん〜のぞ〜あり
山

〜丁〜まよ〜年と〜
雨
宿

〜が〜一休あ〜は〜め
芥
玉

志移ん〜けち分元を〜おやき
一口
窓

大〜を〜ま〜むを〜め
窓
窓

取りゆ〜宿な〜小〜袋のり
糸柳
窓

麻子箱折や〜出テ〜
糸柳
窓

宿場と十二小〜て出〜ん日
串
窓

皮成布から〜か〜む〜
窓
窓

か〜き〜男〜つ〜ん〜
由
窓

あそぶるをいふとくを伯父よこし	富梅
まはらも乃にむくふん入る向ふしよ	法江
梅よ海し一風と中の心大さよふ	富梅
源三位あつくせく二合やどむろふ	風車
そふくさる男がまゑく子を志くり	富梅
ありまゝいぬそくとおめくろりてり	雨標
いろはくう京下へむきあやたらさ	廣紅
めしつぶを和尙ハせんへちるとのけ	芥丈
たきものときき ^ナ 南カ金とドーめ	富梅
かまのあけてししととけるさほ色し	宿弥
かめりりあまらうにして女房けき	允通
よりあやう女房大ギなほ口で浅きく	風頭
急転の目かす町人礼雨物	若竹
のあくあきある内傍ぢやろく	竿山
あうぢやう阿きむぢ花とききをか	若竹
うちまきの地運志くがあきや葉	允通
全減ためるのがくしんはくしん	洗路
古川とかけ糸川とあてあき	竿山

小俊平——とささずりてんき 糸柳
百人並のきりやうだふ令とつち 仇通
阿ふてまそをて見まはさまやう 作平
けごめのとあぶと仁王阿ふき 宗林
彼豆のまふふとての——もあうふ 無石
二夕声で目のさめこのが下女まん 丸丸
いけぬ晩め言さうけく盛ふまね 雨像
くろまんずかこひびきさてるむざうさ 宗林
海さ川あもまふと女房あふまん女あ 墨彦

かんぢりばあめつ下夕あき娘並—— 狐声
あうあうあうあうととととと 横好
客ぞんぞ終後シんきぬぎとととめ 宗林
すまん能がうくと田下つ 酒座り 々
あうりよまきうると化々物持系する 雨像
志海あまやあひめととととと 壺亭
せんじやうの死人のぬのあふこ—— 洗路
接面——きんうでまはらうらうら 柳五
子ぬぐいとやうあふするあふむすこ 雨夕

おいら〜ござは物見の下辰坊キ 宿祢

ふいめんの幕をくだきでもためん 里山

傘のりー人のまゝのハを角 雨夕

お金の器小ざうまんらあうごうり 全

だん舟の旗と山門で乳母かりーる 全

^{大屋}折レらんま水孔ふるののひあつ神 産朝

西三月 本御天満宮奉納句合乳主串標 補助文集 芥丈

ある由祢を社古筆をとらざる之 文集

天神と津い時多城多川祢川長

目小三日延喜すどき夏のまび 卯木

白濁乃は大内を玉のあや 宿祢

大ざうとととと雛をかつぎのこ 丸糸

まきう寺切りで海つくををすく 雨標

たうかう六陸長刀でおどん之 宿祢

夢ん忠誠くらちやうせる小舟を折り 眞文

梅のハ向ひも柳をくよび 姫小

さくやひめ之玉一千のすそうらり 爰中

そまやア草だアをアこんかのがよめあ 由香
百人の心チき人ハ 噂の神かり月 芥夫
ふんどうを孔子よくせがこらふんし 如雀
むぢわいまごまめりこいむぢきき 丸水
かぢわいの内ちりくくと徳言やら 庖言
むぢりりのり雲首がニウあり 串掬
夏中りあるお海くくふニニニ年ニ 柳取
らめんち平もよあるとまお伝をー 考好
年の山前ごのらほいて息子りキ 玉景

おそまの通りおがむ手あふひ子 横好
かじじ門シとむ事仕丁をり 雨憚
夜やどり物さうと志せのりふする 全
せしうちこれ口のふもみちあり 糸柳
合扉風のそんまのう喰成す 夏中
のぶさひけくでまのの初小居ル 柳取
玉小きずを宿と物く特牙お袋 玉作
みの末、梅の折リ枝一ツかき 串掬
こらむぢんごあぶ人ねであふ 雨憚

ちんまりとすゝるとお良は御のまゝ
 赤ん役ろりとおおに 扱でする
 ちれ能喰ら 女らまゝの飯がうた
 まゝに夜城こめてるのちくハお川
 去り おまのふらぬ年につらえ
 おもだつとちやうせんせめハ向ひ合ひ
 節かり何そむで茶えんせめおま
 幕の古いと入居ハ大い 令
 系部でハ系もんハアでハ武部
 文集

ちんまりとすゝるとお良は御のまゝ
 赤ん役ろりとおおに 扱でする
 ちれ能喰ら 女らまゝの飯がうた
 まゝに夜城こめてるのちくハお川
 去り おまのふらぬ年につらえ
 おもだつとちやうせんせめハ向ひ合ひ
 節かり何そむで茶えんせめおま
 幕の古いと入居ハ大い 令
 系部でハ系もんハアでハ武部
 文集

如雀

令

玉香

洗路

門柳

如雀

玉香

雨標

文集

若竹

丸水

左満

玉章

花口

そごう

串様

横好

系柳

下より後猪牙かきも入るあり 柳面
 燭くそこちざりくと書く燭り 一口
 おしきでこのむがえごとと神を引き 又連
 孫り借養ふは女房を素くせる 芥丈
 母娘一もの日おとんさ川あやるか 芥丈
 下子後びくごんまをよめさきさきり 門柳
 神子成見きぬくくまてん文桂 丸新

申七月廿八日

角力白合 呉陵軒木綿追善會

地名ハ有ルが是ハ物事ぬととこ 和笛
 かのり人もきつとこのハ光るなり 間々
 式牧目乃扱も走ぬを行織 和笛
 石山も二ヶ月のどハ紫衣寺之 和笛
 長刀ハ忍り残おも孫ざり知 更者
 此より立殿のきくといふぬこ 口弁
 ともおも堂も縁ある堂あり 又示
 真ねとこ味縁ひこがざんとす 芥里
 木下川を猪牙の通るハ十二日 芥丈

地女ナ乃ハ新ちまきごんご
秋の夜乃こぬ月のをまれ
おりゆめいもれ方へ雲が
女房いこころ夜多き人
伝連續が首引とする三見
男どもゆゆ湯とくく兩大
初めりりしと寺肉のど
よ一系のごう門出と志
よ一系でゆめハ赤もも

如雀
交者
如雀
風既
横好
东王
雅吏
車乃
本々

ゆめちんくもこの余
おにこのものど
寺をいりしともまん
揚枝ふ一交か
春ハ
やん
とら
尺今
仙方

紀系
狐声
間々
全羽
仙羽
全柳
系柳
娘小
費好

静々
 和笛
 紀系
 三丁
 和笛
 車井
 冬好
 龜玉
 如桂

一、系で招ぐ尾都ハハハハハ
 傘の心、袋で丸燧灯とウリ
 月の目、一、態々谷坊と連、ウリ
 又くびつておあ、一、車と海、り、板、
 おむ、ウリ、ウリ、大坂の冬、角力
 娘又、精、を、を、する、中、新、寺
 去、が、思、三、年、並、を、を、を、を、
 なる、う、の、細、ん、と、呉、服、店、下、
 する、乃、年、小、風、あ、う、う、う、う、喜、秋

芥夫
 娘小
 如者
 菱中
 娘小
 如雀
 系柳

中、房、と、中、中、絶、あ、ん、を、し、
 お、の、家、お、を、人、を、を、言、尾、ウリ
 け、ち、を、二、乃、足、さ、い、も、ヤ、シ、カ、セ
 水、中、の、星、が、映、入、リ、子、さ、る、る、
 か、ひ、よ、か、し、身、を、庚、ウ、申、を、娘、ハ、ウ、キ
 骨、の、を、や、し、お、男、小、ト、ア、こ、ま、り
 前、九、年、後、家、を、お、ぬ、の、が、み、や、け、
 人、と、ち、急、と、つ、け、の、い、を、や、娘、人
 紀、の、玉、や、い、い、い、い、い、い、の、り

地忌星 幸がぶんやまろしとれる
 大よぐ二十日かしのめふが二十三
 こびりのついでちうま子殺させる
 百年只内寺の降りさそとびー
 舟ハヤぶ加るの酔つてはびびるの
 白う舞へく川 せんごのもハ九人
 けー系のゆんく月は親もやー
 父互よそのぐう牛れせと受けぬ
 下頭筆まぶき枝本まらふる

小亭 中巻 可儀 和笛 狸声 中巻 又扇 花こ 玉素

義成 忘れよをまぬ不教ある
 あれ者ひと川上へ 八世せむの
 西村とてんとなに物とぬいけけ
 るくくあまて徳折れは名の高す
 石ハ生まてが死めふハ ありぬちり
 馬の生酔をまくらう賣り付ける
 夕立チ乃河で親者れ内縁 日
 三交が三交親月んでつみや喰い
 三ッ三の犬も負ぬといこあり

扇形 串榜 川口 玉素 雅情 洗路 茗故 丸新 洗路

あ六百後ル〜と遊下るる
喉いづぶーやらう人別外小雲
目も鼻もあく様子藤るぞくわ川
いふ事もう黄キ付このがふふあり
少の入りそくな門〜く妻 迹々
何〜まが関亦やありハさ〜れ
死〜るふらん乃下女二三有
秋事まらりとけいせをわ〜ら
〜とぬ 徑と差〜く〜で 孟母〜

葛夫
姫小
玉章
九流
仙客
菱中
玉扇
姫小
雅情

平家物語ハ 只又ふ喰つて矣
〜し本を扱乃君と打ッ面白々
〜らん乃現山〜川いぢり合
梅子の匠十九日みか〜そのち
焚〜うらて〜キあり茶を〜りド
長者の陣と強〜て〜る〜んや下
八會目ゆ〜う白む〜る〜て来白
追居〜川と城及菱中〜り〜る
音所〜ぬ〜の〜陽や〜と〜んい〜

好雀
菱中
芥太
如雀
姫小
芥太
仙架
菱中
花口

ありてありはきりども山越で淋しうり
 切らもとらん色て田ホと浪いおりキ
 ましひとて鬼灯をぬるく
 此ありなきもあきまどやしく氣なるなり
 乙階口まじりあつさうきくすある
 極赤乃ひやうとく和尙有てくれ
 はつに喚ちる古く節のまきま 月
 染一のぐん合ありといえぐぐ
 東のこまとむろく始ま

車井 山路 全 一口 全 車井 全 五章 全

何にやつらまきざり眠りありあり
 白壁千を乃こはら月燈をく
 お一送り日本と江戸のるくある
 此まん名下海のうくこ二三
 括り里のまきとれとあり母くみ
 赤いまの白くくと女房ねむるく
 和泉のつねのまのねくうりのつ節
 手おとらちとこあつくふりうる
 白だくのまきせんをんせを強々

文集 九満 羨中 洗器 全集 全 カタレ

大塚でやうし馬とカッパ
 ちろろの好小まううげびごり
 ぞうエまッーしもつ車のこが栗リ
 六つまでへびを 出さうと入ッり
 さらば早をねてのる後家のとも
 芥子こそ後でうとまぬららの
 ちく筆のやうし流まるらるる
 物ましとぬるとハの念乃らるる
 たじの呪咀ハあをたらうす
 百さじも茶食のぬをよせまへる

久鳥
 里山
 久鳥
 カッパ
 雨夕
 アハ
 西夕
 カッパ

らんちと号し 鱧の子をあづけ
 致方あると致方すそある病とあり
 やがて死すすしと始末忘れと事
 しらぬさうらんとさうむさうらうか
 娘のかまらうしよあぬるすよあり
 ぶそくしんはひと 忘れと
 ぶあまのてをりてつはなうぬら

西夕
 カッパ
 久鳥
 全
 山
 全

六遊舎

どのまめあ
 乙卯や一めらり
 伴色 カッパ
 補助 橋本連弁
 経路形

故人木綿門葉追善記

燒キ筆乃先づ始付ハ玉津崑

故人櫻木

多クハ天窓のりふも蟻り

井賀

瑠璃殿の御阿子へはさんど笠

緑枝

極木屋の歳考ハ的て披露する

豆亀

天王寺来りの額がごらちやびちや

芦夕

正直キの切らなハ神子見え立られ

タロク

本阿弥ハ鯛ハ見まど鯨スんべ

巴江

宮の七吟を夢ぬきも面影あふりて只思ふもの

紫

寛政元年の秋

○俳諧風書品目録

江都上野 花屋葛次郎

俳風柳橋拾遺十冊

柳橋の時代分

同川傍柳

同やりの巻

同折句輕篇之通稱篇

江戸文藝抄の巻

同

同

同

同

俳諧

...

